

牧師室から (2021.3.28)

周りで色々な花が咲き始めているのを見るのが楽しくなってきた。庭のネモフィラも、きれいな青い花を咲かせている。ところが夜に外に出てそれを見ると萎んでいる。関西にいた頃、友人の教会の庭に待宵草が自生していたが、そちらは逆で、夜になると咲き出した。勿論咲きっぱなしのものもあるが、花にも夜形や昼形がある。

今朝(24日)は近くの児童公園に犬の散歩に行ったが、そこに雑草に交じってハルニラが咲いていた。名前の通りニラのような葉っぱを手で傷めてみると、ニラの匂いがした。けれどもニラとは違い、どうやら毒があるという。ハルニラや大アマナなどはその花の形から「ベツレヘムの星」という異名を持っている。

ところが聖書では、これが可憐であるにもかかわらず、「鳩の糞」という可哀想な名前が出てきている。おそらく、岩に落ちた鳩の糞に、その花が似ていたために、イスラエル人がそのように名付けたのであろう。「鳩の糞四分の一カブが五シケルで売られるようになった。」(列王記下6:25)をかつて読んだときに、それが花であるとは知らずに、鳩の落とした糞を集めて肥料にするのか、しかしそれではあまりにも少なすぎるので、あるいは鶯の糞のように化粧品として重宝なのかと思ったことがある。調べてみると、どうやら「鳩の糞」、つまり「ベツレヘムの星」はヒガンバナのように、飢饉の際に、球根の毒を抜いて食料にされていたらしい。

18世紀スウェーデンのリンネという人は、花のおしべとめしべの数に注目して、分類学の基礎を築いた。彼は牧師の息子であり、父や祖父と同じ牧師になるはずであったが、結局は植物学者となった人であった。

以前この欄にも書いたことがある庭のプランターの忘れな草のことだが、昨年遅蒔きして咲かなかったものが、やっと小さな花を咲かせたのは、嬉しいことである。桜もあちこちで開花し始めたし、私どもの教会も、いよいよ今日から礼拝の再開である。

(鈴木淳一牧師)